

## 北京点描

(合)ウッドプランニング

鈴木 正人

### まえがき

毎年一回、一週間程、仕事で中国に行くようになってから5年が経過しました。中国語は一切しゃべれず、片言の英語で、ほとんどが通訳を介しての日本語での生活となっています。5年も継続しているのなら中国語を習っておけばと今になっては思いますが、頻繁に出掛けているわけではなく年に一回だけ、おまけに、行った時には現地スタッフに日本語が堪能な方がいて、日本語で何不自由なく仕事や生活ができるため、中国語を学ぼうという意欲は一切湧かず、いつまでこの仕事が続くのか不明な点も、学習意欲を低下というより、持たせない要因となっています。

ただ、この度、東木協の事務局の方から月報用の原稿を、それも仕事のことでないもので書いて欲しいとの要請をいただきました。多彩な趣味があるわけではなく、仕事を離れての話題は？ と考えたとき、本来の仕事とは若干乖離した、年一回の中国行きの時の、驚きや、失敗談などを書いてみようか…ということになりました。誠に中途半端なテーマ選びとなってしまいましたが、ご容赦いただければ幸いです。

### PM2.5 急速に進む北京の環境改善

北京国際空港に飛行機が降り立つ時、赤褐色を帯びた雲に包まれ、あたりが何も見えない中で、飛行機はぐんぐんと高度だけを下げていきます。レーダーがあるからいいようなもののさぞかしパイロットは不安だろうな—とと思っているうちに、飛行機の窓から突然目の前に建物の輪郭が赤霧の中に包まれたような感じで迫ってきます。これが空港着陸の瞬間で、もちろん有視界飛行なんて無理な状況です。上空は曇り空、遠景は霞んで雲か霧に隠れるようで、さあこれから一週間が始まるぞ！という気分ではなく、何となく目先の暗さを予感させるような雰囲気になってしまいます。

右の写真は私が初めて中国に行った2013年の時の写真です。午後3時頃と記憶していますが上空にある太陽がスモッグの中で黄色というか茜色というか、日本で月を見ているように見え、こんな



スモッグがかかる北京市内（2013年）

太陽しか見られない中国の人は、いくら繁栄を謳歌しているとはいっても、本当に不幸だと感じたことが強く印象に残っています。2013年といえば日本で中国のPM2.5の問題がクローズアップされた時で、偏西風に乗って九州にまでこのPM2.5が飛来していることが指摘されており、なんで中国政府はこのような大気汚染に対する対策を講じないのかという義憤も抱きました。

しかしながら同じ北京市でありながら、右に示した写真は昨年中国を訪問した時の、北京市郊外の西部にある住宅街でのスナップですが、空は青く澄み、街路にはポプラが元気よく育ち、瀟洒な住宅街は清冽な印象を与える—というように、都市環境は一転していました。もちろん2013年の訪日の時にはわずかな時間外出するだけで靴が真っ白くなっていましたが、昨年の訪問時はそんな状況も大きく改善されていました。2013年時の訪中が冬季で、地域暖房に石炭が使用され、PM2.5の発生が多い時期にあっていた反面、2017年の訪中は夏場近くの訪問となったという季節的な要因も関連していると思われませんが、最大の要因は、2017年5月に習近平主席が世界に呼び掛けた「一帯一路」サミットが北京で開催され、中国政府が威信をかけてPM2.5対策を実施、石炭の使用を全面禁止するといった徹底した対策を講じたことがこのような結果を招いたといえます。

環境改善の進展に向けた印象を新たにした昨年の訪中でしたが、本年の訪中では、靴の汚れこそなく、街路は清掃が行き届いてはいましたが、昨年のようにくっきり澄んだ青空には会えずじまいとなりました。でも、持って行ったPM2.5対策用のマスクも使わずじまい、北京市内を行き来する人たちからもマスクが姿を消していたのは昨年からのことです。

インターネットでは中国国内の都市だけでなく日本も含めた世界主要国の大気汚染状況を確認できるウェブサイトがあります。「AQICN.org」リアルタイムPM2.5大気指標サイト([aqicn.org/city/all/jp/](http://aqicn.org/city/all/jp/))ですが、これによると4月30日に北京のPM2.5の値は最小で63、最大で216と高く、東京の最小5、最大154と比較して依然高い数値を示しています。中国の北京以外の都市では、成都が最小55、最大で824と飛びぬけて高い値を示し、外出は避けたい状況が続いているほか、上海も最小が82、最大が195と敏感な人には影響が出る水準で推移しているようです。ちなみに日本の環境基準は1日の平均値で1 m<sup>3</sup>あたり35 μg、これに対して中国の環境基準値は75 μgと緩い値となっています。

2017年の一帯一路サミットで大きく環境政策に舵を切った中国は、石炭からの脱却を大きな政策目標としているようですが、このような環境政策は一般の経済政策にも強く適用されているようです。本年の訪中時に北京と上海の中間に位置する徐州市の積層材工場を視察する機会に恵まれたのですが、この工場ではKD設備を有せず、KDは外注に出しているということでした。工場には製材時の廃材が多数置かれて出荷を待っている状況でしたので、この廃材を利用して自分のところでKDを行えば良いのでは？との疑問をなげかけたのですが、この工場の経営者は、「中国では自社製材の廃材を自社で焼却することが禁じられており、工場の廃材はすべて指定の火力発電所に持ち込まなければならない。自社での



澄み渡る青い空 北京市郊外（西部）の住宅地（2017年）

廃材の焼却による熱利用は大気汚染を深刻化させるために禁じられている」と説明していました。焼却施設の性能の問題等もあると考えられますが、政府が大気汚染の解消に向け厳しい経済政策を実施している一つの表れとして印象深い事例と思えました。

### 緑化が進む中国 国連世界森林デーでも成功事例を紹介

国連は2012年に、毎年3月21日を「国際森林デー」と定め、人類にとって森林が水、空気、食料の供給の源となっていることを指摘し、森林の大切さを強く世界に訴えてきています。本年の国際森林デーのテーマは「森林と持続可能な都市」となりました。現在、人類史上初めて世界人口の半数以上が都市に住んでいますが、この傾向はさらに強まり2050年には世界人口の2/3に及ぶ60億人が都市に集まると予測されています。そこで、国連は、「都市化が必ずしも環境汚染の拡大につながるわけではありません。都市に緑を増やすことで、次世代のためにもっと美しい健康的な都市を作ることができます。森林には気温を最大8℃も下げる効果があります。都市の緑化は大気汚染の改善とCO<sub>2</sub>の削減に大きな力を果たし、気候変動を和らげます。」として、都市部での緑化の促進を大きなテーマとして取り上げ、本年のテーマとした理由を説明しています。

このような国際森林デーを契機にFAO(国連食糧農業機関)では、世界の都市の緑化の取組みを紹介する冊子を発行しています。この冊子はFAOのホームページからダウンロード可能ですが、中に「首都北京を森の都とする」緑化プログラムが2004年から遂行されていることも紹介されています。5400万本の植樹を行い7万haの森林を創出する運動は北京市郊外で着実に進行し、すでに各所で森の造成が進んでいます。右の写真はこのパンフレットに掲載された事例です。黄砂飛ぶ荒れ野の



北京の緑化

風景が印象深い中国ですが、日本で戦後盛んに進められた植樹活動と同じような取組みがいま中国各地で進められているということを実感をもって感じ取れるところです。戦後50年を経過して緑の国土を実現した日本のように、50年後の中国は、黄砂とPM2.5で代表される中国ではなく、緑豊かな国土と木材の輸出国としての地位を築いているのかもしれない。

### 失敗談を一つ 白酒(パイチュウ)の恐ろしさ

中国訪問のなかで、失敗談に結び付きやすいのが中国版乾杯の恐ろしさです。酒宴の席というと、中国でもスタートは日本同様ビールでということになっているようですが、興が乗ってくるとアルコール度数50度以上の高度酒にあたる白酒(パイチュウ)を持ち出されることが多いと感じます。年代物だよという説明を受けながら、これを乾杯用の小さな小酒杯に注ぎ、一気に飲み干す、飲んだ後はその小酒杯を傾けて相手に底が見えるようにしたり、逆さにして飲み干したことを示す。これが一回限りではなく、相手を変えては、延々と続く。飲んでいるときはいたって正常に会話も進んでいるのですが、いつの時

点なのか、突然記憶が途切れる……。

翌朝、目覚めてみると、昨日の服装のままベットに横たわっている自分を発見し、何で！という疑問を自分に投げかけるのだが、記憶が一切ない。おまけに頭も痛い。最悪の一日が始まる。朝食など胃が受け付けない。もちろん昼食も食指が動かないどころか、見るだけで気持ちが悪くなる。何とか体調が戻るのが午後遅くになってから。体調不良のまま無理やり仕事を片付け、何とか体調が落ち着いてくると、ようやく昨夜の行動に疑問が生じ、さて、昨夜はどうやってベットまでたどり着いたのだろうかと思悩む。ただし、周りは冷たいもので、「酔ってはいたけど、普通にしゃべっていたし、自分で部屋に戻って行ったよ」程度の説明しかしてくれない。冷たいものだ。もう少し親身になって状況を説明してくれてもよさそうなものなのに…。失態の状況を聞いたらさぞかし落ち込むだろうから言葉を濁しているのかな…。いろいろと想像を巡らせながら、もう白酒は絶対に飲まないでおこう—と心に誓ったところでした。



天安門広場の前で記念撮影する筆者